

努力の機構メカニスム

——ベルクソンにおける「運動図式」と「力動的図式」——

瀧 一郎

序 図式とイマジユとの戯れ

あらゆる知的な活動には多かれ少なかれ努力(effort)が伴ふ。この心の中の努力が何故に生ずるのかについては、つまり努力の動因については今は問はない。ここで問題にしようとするのは努力が如何にして生ずるのかといふこと、すなわち努力の機構もしくは構造である。そして、この問題に哲学的もしくは美学的な光を当てたものとして、ベルクソン(Henri Bergson, 1859—1941)の図式論がある。ベルクソンは「知的努力」(一九〇二)〔後に『靈的エネルギー』(一九一九)に所収〕といふ論文において、「力動的図式」(le schéma dynamique)といふ概念を立てて主題的にこの問題を論じてゐるが、それ以前の『物質と記憶』(一八九六)のなかで既に、「運動図式」(le schéma moteur)といふ類似の概念が出されてゐる。しかし、この両概念の関係については未だ十分な解釈がなされてゐないやうに思はれる。したがつて本論は、両概念を比較考量して両者の関係を説明することに議論の主眼を置きながら、ベルクソンが「心的(mental)な努力のメカニスム」(E. S., 189, OE., 958—9.)と呼ぶものを考察しようとする試みである。

論述を始めるにあつて注目されるのは、「知的努力」の末尾に見える次の言葉である。「われわれの目的はただ次のことを示すことであつた。すなはち、知的努力を図式とイマジユとの間の戯れ (*un jeu entre schémas et images*) に還元することが、心理学的説明として最も単純なものであると同時に、内的な観察に最も一致するものでもある」といふことである。」(DE, 1530; MEI, 550.) 「図式とイマジユとの間の戯れ」といふ表現の曖昧さゆゑか、この文章は後に差し替へられることになるが、少なくともここには、知的努力の中核において図式がイマジユと緊密に連関しながら働いてゐるとするベルクソンの洞察が読みとれる。

したがつて「図式とイマジユとの間の戯れ」といふのは、心の努力の本質を規定する働きであると言つてよい。ただし「イマジユ」の概念は、二元論を乗り越えるためにベルクソンの立てた戦略的概念とも言ふべきもので、多くの問題を孕んだ難解なものであるから、いま立ち入つてこれを論ずるわけにはゆかない。ここではただ、イマジユといふ言葉が、(例へば「想ひ出—イマジユ」と言はれる場合のやうに) 観念論的な意味で表象 (*représentation*) の側に引きつけて用ゐられることもあれば、(「知覚—イマジユ」と言はれる場合のやうに) 実在論的な意味で物 (*chose*) の側に引きつけて用ゐられることもある、といふベルクソンの用語法を、確認するに留めよう。

本論の構成は次のやうである。第一節では『物質と記憶』の第二章で論ぜられる「運動図式」の概念を明らかにするが、「想ひ出⁽¹⁾の現実化」(*réalisation des souvenirs*) といふ場面でこの概念が導入されるので、まづ(一)記憶および再認をそれぞれ二つの形式に分かつベルクソンの理論的枠組みを確認する。つぎに言葉の聴覚的再認といふ例をとりあげて、(二)対象の側からの刺激による自動的な感覚—運動過程と(三)主体の側からの意志的な記憶への呼びかけといふ二つの働きのなかで運動図式がいかに関与してゐるかを明確にしたうへ

で、(四)「回路」に譬へられる反省的||反射的知覚においてこれら二つの働きが運動図式によつて統合されると見るわれわれの解釈を示したい。

つづく第二節では、「知的努力」のなかで論ぜられる「力動的図式」の概念を明らかにする。そのために(一)『物質と記憶』の第三章に見える「意識の平面」および逆円錐のイマージュと(二)「知的努力」で語られる金貨およびピラミッドのイマージュとを比べあはせることによつて、力動的図式がいかなる点で運動図式と異なつてゐるか、またいかなる点で同じであるかを見定め、最後に(三)「創出の努力」(l'effort d'invention)にベルクソンが見出す「図式とイマージュとの間の往来」(E. S., 182, E., 953.)のうちに力動的図式の特性を読みとることにしよう。

第一節 想ひ出の現実化 — 運動図式 —

(一) 記憶および再認の二形式

ベルクソンによれば、記憶(mémoire)とその現実的作用である再認(reconnaissance)とは、おのおの極限において全く異なつた二つの形式を有する。まづ記憶には、過去を(一)運動機構(mécanismes-moteurs)の中に保持するものと(二)想ひ出—イマージュ(images-souvenirs)の形で保持するものがある。それら。学課の暗誦を例にとれば、反復によつて習得された(行動としての)「学課の想ひ出」は前者、特定の日時(表象としての)「朗読の想ひ出」は後者によるものといふわけである。これら二つの記憶について、シュヴァリエのやうに、身体に限局された前者の習慣—記憶を「身体の記憶」、身体から独立した後者の純粹記憶を「精神の記憶」と呼ぶ^②ならば、両者の弁別は容易とならう。

ベルクソンによれば、再認とは「われわれが過去を現在のなかで捉へ直す具体的な行為」(M. M., 96, OE., 235.)であるが、再認もまた上に述べた記憶の二形式に応じて、(1)運動によつて行なはれる自動的な再認と(2)表象によつて行なはれる注意深い再認といふ二形式を有する。前者は、たとへば住み慣れた街を殆ど無意識のうち歩きまはる場合に見られるやうな、身体によつて演ぜられる受動的な再認であり、後者は、見知らぬ街に初めて足を踏み入れて行きまどふ場合に見られるやうな、想ひ出—イメージによる能動的な再認である。

以上のやうな記憶および再認の二形式は、理論の上では互ひに独立した純粹な形式であつても、現実には両者が入り難じつた中間的な記憶や再認が見出される。この混合的な現象から運動と想ひ出—イメージといふ二つの要素をあらかじめ分離しておいて、それから両者がいかなる働きによつて紛れあふことになるかを探らうとするのがベルクソンの方法である。そして、二つの形式を實際に繋ぐものこそ運動図式に他ならないといふことを以下にわれわれは論証するつもりである。

「時間に沿つて配列された想ひ出(souvenirs)から、空間におけるその想ひ出の初発的(naissance)もしくは可能的行動を描く運動(mouvements)へと、われわれはごく僅かづつ推移する。」(83, 225.)「想ひ出の現実化」といふのは、この命題に述べられてゐるやうな「想ひ出から運動への漸進的推移」(107, 244.)の過程であると言つてよい。この過程において、運動図式が次の二つの位相にわたつて関与することをベルクソンの挙げてゐる具体例(言葉の聴覚的な再認)に即して見てゆきたい。二つの位相とは記憶および再認の二形式に対応するものであつて、それは即ち、ベルクソンが言葉の聴覚的再認に認めてゐる「(a)自動的な感覚—運動(sensory-moteur)過程、および(b)イメージ—想ひ出の能動的な、言はば離心的な投射(projection)」(119, 254.)に於て。

(二) 感覚—運動過程 (対象から主体へ)

ふたりの外国人が私の知らない言葉で話してゐるとしよう。私には雑音としか聞こえない音の連続を、彼らは語や音節としてはつきり聞き分けてゐる。想ひ出に過ぎぬ言語の知識が、いかにして知覚のありやうを変化させることになるのか。ベルクソンはここで、「聞かれた語句を分解して、その主要な分節を際立たせることのできるやうな初発的運動を、聴覚的印象が組織する」(121, 255.)と考へる。その場合、「われわれの意識のうちに初発的な筋肉感覚といふ形で、聞かれた言葉の運動図式 (le schème moteur) とも言ふべきものが展開してゆくことになる。」(Ibid.) さうなると、外国語が聞き取れるといふことは、「発声筋の運動傾向を耳の印象に連繋させる」ことであり、「運動的随伴 (l'accompagnement moteur) を完全にする」(Ibid.) ことである、と考へられる。すなはち、聞き手が話し手の運動を内的に繰り返し、あるいは模倣するやうな自動的運動によつて、連続した音の集合に分節が加へられるわけである。

したがつて、感覚—運動過程における運動図式の役割は、分解と再構成とを行なひながら運動の大筋を示すことである、と言つてよい。しかし、われわれはここで、運動図式の自動的な性格が招きかねない誤解を除去しておかなければならない。さきに見たやうな自動的な再認、すなはち思惟されるといふよりむしろ演ぜられる全く受動的な再認においては、「習慣が身体のなかに作り上げた運動装置」(267, 367.) が働くことされるが、運動図式をこのやうな自動的に作動する運動機構に還元することができるであらうか。あるいはドゥルーズのやうに、運動図式を「全く感覚—運動的」な「機械的運動」と看做してよいであらうか。³⁾ 否である。さう考へるなら、運動図式の本性を見誤ることにならう。

ベルクソンによれば、運動図式とは、「完全に機械的 (mécaniques) な活動より以上であるが、意志的 (volontaire) な記憶への呼びかけより以下」(125, 258.) であるやうなもので、「言葉の聴覚的印象が分節

運動に延びてゆく傾向 (tendance)、確かにわれわれの意志の習慣的な統御を脱するものではなく、おそらくは初歩的な識別作用さへも含んでをり、また正常な状態では、聞かれた言葉の際立つた特徴の内的反復となつてあらはれるやうな傾向」(125-6, 258-9.) のことである。したがつて、運動図式は、「意志 (la volonté) と自動作用 (l'automatisme) との境」(128, 260.) を示すものであつて、言葉が聞き取られる場合には、対象からの刺激による自動的な感覚—運動過程においてのみならず、主体による意志的な記憶への呼びかけにおいても機能すべきものである。

この点については、ジャンケレヴィッチの解釈が正鵠を射てゐるやうに思はれる。極限まで押し進められた二元論を緩和するためのものとして運動図式を捉へるジャンケレヴィッチは、これを「靈的 (spirituel) なものと身体的 (physique) なものとの出會ひの場」であるとし、「イマジューと運動との媒介物 (médiateur)、あるいはそれらに共通の環境 (milieu)」として役立つものと考へてゐる。「それ〔運動図式〕は、まづ知覚にてゐるので運動的 (moteur) であり、そのうへ觀念の性質を帯びてゐるものがすべてさうであるやうに図式的 (schématique) である⁽⁴⁾」このやうに運動図式は、身体と魂との間にあつて、運動と(表象としての)イマジューとを媒介する、半ば自動的で半ば意志的な両義的性格を有するものと見なくてはならない。それでは、言葉の聴覚的な再認において運動図式は、イマジュー想ひ出の投射とどのやうに關はつてくるのであらうか。

(三) 記憶作用による想ひ出の投射 (主体から対象へ)

ベルクソンは、「音が隣接によつて聴覚的想ひ出を喚び起こし、さらに聴覚的想ひ出が諸觀念を喚び起こす」(129, 261.) といふ連合主義的な考へ方を論駁し、これとは逆に、われわれはまづ「諸觀念から出發して、耳の知覚する音の連続を再構成する」(Ibid.) と主張する。「われわれは知覚 (la perception) から觀念 (l'

idee)へと行くのではなく、観念から知覚へと行くのであつて、再認の特徴的な過程は、求心的(centripète)ではなく遠心的(centrifuge)である。」(145-6, 275.) 他人の話を理解しようと思つて聴くとき、われわれは聴覚的印象(運動)がそのイメージ(想ひ出)を捜しに行くのを受動的に待つてゐるわけではない。そこにはすでに観念から知覚へ向かふ精神の能動的な働き、すなはち、イメージ想ひ出を知覚の方へさし向ける記憶作用があるはずである、といふ考へである。

「われわれは観念から出発し、それを聴覚的なイメージ想ひ出(souvenirs-images)に展開するが、これらのイメージ想ひ出は、運動図式のなかに組み込まれて、聞かれた音に重なり合ふことのできるものである(「……」。そこには、ひとつの連続的な進行があつて、それによつて観念の雲がはつきりした聴覚的イメージに凝縮し、これらのイメージは、なほ流動的ではあるが、つひには物質的に知覚された音と癒着して凝固しようとする。」(135, 266.) 要するに、想ひ出の現実化を「潜在的(virtuelle)なイメージが実現する進行」(146, 275.)として捉へるベルクソンは、観念すなはち純粹な想ひ出から、聞かれた音すなはち知覚へと至る過程に、潜在的な想ひ出—イメージが運動図式を介して次第に顕在化する連続的推移を見てゐるのである。運動図式は、それゆゑ、観念から知覚への橋渡しをする現実化の原理である。

この現実化が成し遂げられる際には、「イメージ想ひ出の規則的介入」(107, 244.)、すなはち、運動図式によるイメージ想ひ出の選別が必要とされる。感覚—運動過程においては、運動の大筋を示すといふ意味で「略画」(123, 257.)「下絵」(124, 257.)あるいは「素描」に譬へられる運動図式が、ここで「空の容器」(135, 266.)もしくは「額・枠」にも譬へられるのは、そのためである。

しかし、観念から知覚へと現実化が進むと考へる場合に、初めは知覚にあらはれてゐなかつたものが段々と知覚されるやうになるといふ事態は、いかにして説明されるのであらうか。本節の最後では、知覚・注意(「at-

ention)・記憶についてのベルクソンの一般的考察を検討しながら、外的対象によつて引き起こされる感覚―運動過程と主体の側からのイマジュー想ひ出の投射との繋がりを考へなければならぬ。

(四) 回路としての反省的Ⅱ反射的知覚

ベルクソンは知覚の過程を光線の反射に比較してゐる(Cf. M. M., 34-5, E., 187-8.)。すなはち、光線は通過できない媒質に出会ふと、逆もどりして光源の虚像をむすぶが、それと同じやうに、物(対象)が身体(主体)に及ぼす作用も、それが運動に続いてゆかない場合には、表象の形で物に送り返されるといふのである。このやうな光の反射の譬喩は、知覚における対象と主体との相互関係を理解可能にするモデルとなつてゐるやうに思はれる。⁽⁶⁾

知覚が注意の努力を伴ふ場合にも、ベルクソンはこれを「反射」と捉へ、さらに「反省的Ⅱ反射的(reflexive)知覚が回路(un circuit)である」(114, 249.)と主張してゐる。「あらゆる注意深い(attentive)知覚は実際に、語源的な意味で反射(une réflexion)を前提とする。すなはち、能動的に創造され、対象と同じか若しくは似てゐて、対象の輪郭に合はせて作られるやうになるイマジューの外的投射を前提とする。」(112, 248.)ここでは、対象が感覚を刺激し、感覚が観念を出現させるといふやうな、外から内に「一直線に進む一連の過程」ではなく、対象から発する動揺が精神の深みにとどまることなく(記憶作用による想ひ出^{メモワール}の投射によつて)対象自体に帰つて来るやうな、循環系をなす「回路」が考へられてゐるのである。

「われわれの判明な知覚は、実に閉じた円(un cercle fermé)にも比すべきもので、そこでは、精神にさし向けられた知覚―イマジューと空間にうち放たれた想ひ出―イマジューとが相前後して走ることになる。」(113, 249.)ベルクソンによれば、精神とその対象とが連帯してひとつの全体をなすこのやうな閉じた回路は、

精神の集中度が高まるにつれて、より大きな回路として全く新しく創り直され、それに応じて知覚が豊かに拡大される。したがって、要約すると、観念から知覚へと進みゆく想ひ出の現実化の過程では、知覚の側からの物理的刺激と観念の側からのイメージの投射、換言すれば、外部の対象から来る求心的な流れと主体から発する遠心的な流れといふ二つの運動が、連結して幾つもの円運動をなしてゐる、といふことになる。

それでは、知覚が判明になる際に、運動図式はどう関与してゐるのか。「われわれの記憶は、類似したさまざまにイメージを代はる代はる選んでは、それを新しい知覚の方へ投ずる。しかし、この選択は偶然になされるわけではない。諸々の仮説 (hypotheses) を暗示し、遠くから選択を司るもの、それは、知覚を継続させ、知覚と想起されるイメージとの共通の枠 (cadre) として役立つ模倣運動である。」(112, 247-8.) この模倣運動こそ運動図式の発動形態と言ふべきである。かくて運動図式は、「可変的で柔軟な仮説、検証に充てられた仕事の途中で修正が可能な仮説」(Metl., 705.) として、イメージー想ひ出を規則的に紹介させて、回路の運動を可能にするものと言ふことができる。

以上の考察から、『物質と記憶』で論ぜられた「運動図式」の主な特徴を次のやうに列挙することができる。

(1) 「運動図式」は、言葉の聴覚的再認において理解(聴取)を可能にするやうな運動傾向として導入された概念である。

(2) 先づ、自動的な感覚ー運動過程を考へた場合、運動図式は初発的筋肉感覚といふ形をとり、聴覚的印象に働きかけてそれを分節化しながら運動の大筋を示す。

(3) 次に、意志的な記憶への呼びかけを考へた場合には、運動図式は記憶によるイメージー想ひ出の投射を制御し、その選択を規制する。

(4) しかし実際には、注意の努力を伴ふ知覚において上の二つの働きは別々のものではあり得ず、「回路」と

いふひと続きの運動になつてゐる。

(5) すなはち運動図式は、観念から知覚への行程で、潜在的なイメージを「回路」の反射的運動を介して徐々に顕在化しつつ想ひ出を現実化することを本質とするやうな、

(6) 精神と物質、魂と身体とを繋ぐ媒介項である。

第二節 創出の努力 — 力動的図式 —

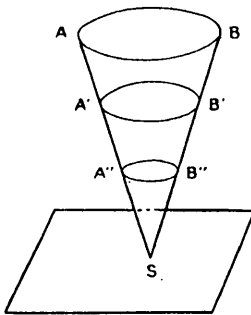
(一) 意識の平面と逆円錐

前節で見た運動図式と類似の概念である力動的図式が登場するのは、六年後の「知的努力」においてである。この論文でベルクソンは、「知的努力 (Ieffort intellectuel) の知的な特徴は何であるか」(E. S., 154, 931.)を問題にして、想起 (rappel) の努力から知解 (intellection) の努力、さらには創出 (invention) の努力を順に取り上げる。そして一般に、容易な再生 (reproduction) の努力から困難な産出 (production) の努力に至るまでの諸々の知的活動が同じ構造をもつことを明らかにしようとする。

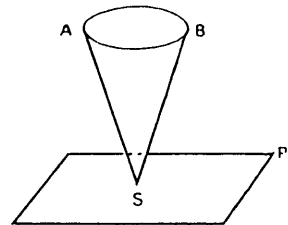
まづ想起の努力についてベルクソンは、『物質と記憶』で論ぜられた様々な「意識の平面」(plans de conscience)の系列、すなはち「未だ判明なイメージとなつてあらはれてゐない、純粹な想ひ出から、この同じ想ひ出が初発的な感覚や開始された運動に現実化されたものに至るまで」の系列を再び引き合ひに出して、次のやうに言ふ。「想ひ出を意志的に喚び起こすことは、これらの意識の平面を一定の方向に、次々と縦貫することにある。」(155, 932.) 意識が或る平面から別の平面に動くとはいかなることであらうか。今ひとたび『物質と記憶』に立ち返り、ベルクソンがそこで掲げた二つの逆円錐の図⁸⁾を見ておかう。

ベルクソンによれば、「私の記憶に蓄積された想ひ出の全体を円錐S A Bによつてあらはすとすれば、底面A Bは過去に位置して不動のままであるのに対して、あらゆる瞬間に私の現在を表はす頂点Sは不断に前進し、宇宙についての私の現実的表象である動的平面Pに、やはり不断に接触する。」(M. M., 169, *Œ.*, 293.) Sには「感覚—運動現象の座」である身体のイマジージュが集中するとされる。したがつて、ベルクソンの言ふやうに、この逆円錐は一般に「過去と現在との関係」および「魂と身体との関係」を説明するためのものであることがわかる。

ここでわれわれが注意すべきは、前節の(一)で見た二つの記憶の繋がりがこの図で示されてゐる、といふ点である。ベルクソンによれば、「習慣が組織した感覚—運動系の総体によつて構成されてゐる身体の記憶」は頂点Sに位置し、「過去の本当の記憶」(純粹記憶)は底面A Bに位置するが、両者はそれぞれ別々のものといふわけではなく、互ひに支へあふものである。といふのは、後者は前者に対して、現在の状況に相応しいすべての想ひ出を差し出し(記憶作用によるイマジージュ—想ひ出の投射)、また前者は後者に対して、過去の想ひ出を物質化||具体化して現在に蘇らせる手段を与える(感覚—運動過程)といふ両者の働きが相俟つて、潜在的な(すなはち無意識的な)想ひ出が顕在的な(すなはち意識的な)知覚になる、とベルクソンは説明してゐるからである。



(181, 302.)



(M. M., 169, *Œ.*, 293.)

要するに、想ひ出の現実化は、純粹記憶による形相因（イマージュ—想ひ出）の提供と身体の記憶による質料因（感覺・運動）の提供とによつて成立するといふわけであり、逆円錐の図は二つの記憶の相互補完性を示すものと言へよう。「實際、ある想ひ出が意識に再現するためには、その想ひ出が純粹記憶の高みから、行動（*action*）が成し遂げられる正にその点にまで降りてくる必要がある。」（170, 293.）したがつて、前節の結論に照らしてみるならば、想ひ出が現実化されるときには、運動図式によつて円錐の底面 AB （純粹記憶の高み）から頂点 S （行動が成し遂げられる点）への運動が推進される、と考へることができる。

それでは、過去 AB と現在 S との間にある断面 $A'B'$ 、 $A''B''$ などは何を意味してゐるのか。「点 S で表はされた感覺—運動機構と AB に配置された想ひ出の全体との間には、「……」われわれの心理的生活（*vie psychologique*）の無数の反復の余地があり、それらが同じ円錐の $A'B'$ 、 $A''B''$ などの無数の断面によつて表はされてゐる。われわれは、感覺的で運動的な状態からますます離れて夢想（*rêve*）の生活を営むにつれ、 AB に分散する傾向があり、現在の現実に一層強く結びついて感覺的刺激に対し運動的反應でこたへるにつれ、 S に集中する傾向がある。」（180—1, 302.）ここでまづ確認できるのは、中間の断面 $A'B'$ 、 $A''B''$ などが、ベルクソンの言ふ「記憶の無数の可能的状態」（187, 307.）を表はしてゐるといふことである。そこには、ドゥルーズの分析どほり、「物質の \wedge 物理的（*physique*） \vee 反復とは全く異なつたタイプの \wedge 精神的（*psychique*） \vee 反復」があると言つてよい。

しかし更に、正常な自我（われわれ）が両極の間を揺れ動くと述べられてゐる。ベルクソンによれば、この運動は「意識がその内容の展開をひき締めたり拵げたりするやうな収縮（*contraction*）と拡張（*expansion*）との二重運動」（185, 305.）である。してみると、この逆円錐のイマージュのうちに読み取られるべきものは、二つの記憶の区別ではなく両記憶を繋いでゐる意識のこの二重運動である。ここで運動図式は、円錐内を頂点 S に

向かつて下降するのみならず収縮する運動に即して動く、と考へるべきである。

以上に見たやうな「精神が、行動の平面〔P〕と夢想の平面〔A B〕といふ二つの極限の間に含まれる隔たりを絶えず貫いて走る」(192, 311.)といふ「意識の平面」の分析は、『物質と記憶』の出发点であつたと言はれる。⁽¹⁾この著作の骨格を作りあげたイマージュとも言ふべきこの動的な円錐のうちに、「知的努力」に登場する力動的図式といふ概念の胚胎を見ようとするムレロスは、両者を結びつける際に、「ベルクソンがわれわれを創造の過程と過去の再構成の過程とに同時に直面させる」⁽²⁾といふ点を強調するが、われわれもそのやうな考へに賛成である。それでは、創造の原理として機能する力動的図式とはいかなるものか、次にそれを見てみよう。

(二) 金貨とピラミッド

「知的努力」においても、ベルクソンはやはり二つの記憶を区別することから始めてゐる。ただしここでは、「意識の平面」が弁別のメルクマールとなつてゐる。まづ、二つの記憶のうちの一方は、「聴覚的、視覚的、運動的イマージュを並べて、それらを元のままの生状態で覚えておく」(E. S., 156, D., 932.)やうな「機械的記憶」で、例へば暗誦した詩句を口に出して言つてみると「語が語を呼ぶ」やうな場合である。かかる場合には、「複雑な想ひ出を想起することの容易さは、その想ひ出の諸要素が意識の同一平面上に拡がる傾向に正比例することになる。」(159, 935.)もう一方は「知的記憶」で、これは記憶術の書物が教へるやうな、想ひ出すには多くの時間がかかるが、覚えるには少ない時間ですむやうなものである。この場合は、「想起が努力を伴ふのは、精神が或る平面から他の平面に動くからである。」(Ibid.)

ベルクソンによれば、第二の記憶における想起の場合、「多数のイマージュが唯一で単純な不可分の表象に凝縮するやうに思はれる一点 (un point) にわれわれは身を移す。自分の記憶に託すのは、この表象である。そ

ここで、想ひ出す時が来るとわれわれは、ピラミッド (la pyramide) の頂上から底面に向かつて再び降りるであらう。」(160, 936.) ここでは「その他の一切が小銭 (monnaie) にすぎないやうな唯一の基本貨幣〔金貨〕 (piece) を手に入れることが問題である。」(161, 936.) ベルクソンは、このやうな「多くのイマージュに展開しうる単純な表象」を「力動的図式」と名付けてゐる。その例として、チェスを指す人が駒を機能として表象しながら各々の勝負を記憶する際、各勝負に帰する「顔つき」や、思ひ出せぬ人の名を思ひ出さうとするときに出発点となる「一般的印象」などが挙げられるが、いづれの場合も、「想起の努力は、諸々の要素が浸透し合つてゐる図式的な表象を、諸々の部分が併置されるイマージュ化された表象に変へることにある。」(167, 941.) とされる。

力動的図式は、「喉元まで出かかつてゐる言葉」⁽¹⁴⁾にも似た「定義しがたい何ものか」(162, 937.) であるといへ、誰もがそれについての「感じ」(Ibid.) をもつてをり、その存在は「事実」(188, 957.) であると言はれる。この図式が「dynamique」たるゆゑんは、ベルクソンによれば、それが「柔軟な、あるいは動的な (mobile) lastique ou mouvant) 図式」(176, 948.) であるにとどまらず、「諸々のイマージュを再構成するために何をすべきかといふ指示を含んでゐる」(162, 937.) からである。それゆゑ、力動的図式は、その展開が可能態から現実態への移行であるやうな運動傾向であつて、ジャンケレヴィッチの言葉を借りれば、「開始の力」(la puissance du commencement) を有する「魂の尖端」(acumen mentis) ⁽¹⁵⁾ であると言つてよ。

このやうに、創始する力であり創造を指導する原理であるからこそ、力動的図式は、想起のみならず知解や創出といった知的努力をも説明しうる基本的概念たりうるのであらう。かうしてベルクソンは、あらゆる知的努力に次のやうな同一の構造を認めてゐる。「知的に働くといふことは、異なつた意識の平面を貫いて、同一の表象を抽象的なものから具体的なものへ、図式からイマージュへ行く方向に導くことにある。」(176-7, 948.) ベル

クソンはここで、「イマージュにイマージュを連合せながら、たとへば水平の動きと呼ばれるやうな動きで唯一の平面を動く」のではなく、「動きが垂直で、或る平面から別の平面へとわれわれを移す」(166, 940.)やうな動きに知的努力の本質を見てゐるのである。

以上の要約を踏まへて、「知的努力」の力動的図式を『物質と記憶』の運動図式と比べてみよう。まづ指摘されなければならぬことは、どちらの場合にも、意識の平面を垂直に貫いて下降する運動が強調されてゐるといふことである。この運動は、潜在的なものを顕在的なものへ、可能的なものを現実的なものへ、あるいは抽象的なものを具体的なものへ(さらに一般的には時間的なものを空間的なものへ)もたらす霊的エネルギーをあらはしてゐる。それゆゑ、両図式がこのやうな本性を共有してゐることは明らかである。

しかし、異なる名称で呼ばれる以上、両図式の間には何か相違があるのであるのではないかと先づは考へてみる事ができよう。努力の垂直性について、「知的努力は『物質と記憶』の中で考案された円錐の内部を上から下へ動く」⁽¹⁶⁾とジャンケレヴィッチは述べてゐるが、われわれが問題にしたいのは次の点、すなはち『物質と記憶』の円錐においても「知的努力」のピラミッドにおいても上から下へと具体化が進むとされてゐるにも拘はらず、両者が互ひに頂点を逆さまにしてゐるのは何故か、といふ点である。ベルクソンが懐いたこのイマージュの違ひのうち二つの図式の差異が示唆されてゐるのではないか。そこで、以下これについて(1)時間、(2)空間、(3)経験の様態といふ三つの観点から解釈を試みてみよう。

(1) まづ時間といふ観点から見た場合、逆円錐において、夢想の平面(底面A B)には「過ぎ去つたわれわれの生活のすべての出来事が極めて細かい所まであらはれてゐる。」(M. M., 186, 95, 306.)一方、頂点Sは行動の平面(P)に絶えず接触する「私の現在」をあらはしてゐた。ドゥルーズの解釈では、「有名な円錐の譬喩は、⁽¹⁷⁾〔現在と過去との〕この共存(coexistence)の完全な状態をあらはしてゐる。」運動図式による逆円錐内の下

降運動は、したがつて、「本質上、潜在的である過去」(150, 278.)の、現在へ向けての顕在化を意味する。しかるに、ピラミッドの譬喩では頂点にあるのは力動的図式であり、われわれは先づそこに身を置いてから時間の経過と共に「次第に高くない平面、次第に感覺到近くなる平面に移つて行き、そこでは単純な表象が諸々のイメージに分散し、それらのイメージが文章や語に展開する」ことになる。ここには、現在から未来の開かれた可能性、もしくは未規定性へ向かふ方位が見られる。

(2) 次に空間といふ観点から見れば、逆円錐のイメージは、「精神の活動が、蓄積された想ひ出の総体を無限に越えてをり、この想ひ出の総体もまたそれ自体、現在の時間の感覚と運動とを無限に越えてゐる。」とするベルクソンの考へがこれを形づくつたと思はれるが、ここでの下降運動は、点「利刀の刃」(M.M., 117, 251.)として表象される行動する身体に向かつて、精神がその内容を「分かたれぬまま」(188, 308.)ひき締める「収縮」の運動である。一方、ピラミッドの譬喩では、下降運動はひとつの図式的表象を諸々のイメージへ物質的に、具体的に実現する「展開」の運動である。したがつて、どちらも潜在性から顕在性への方位をもつものでありながら、そこには潜在的多様性といふ限りでの精神としての \wedge 多 \vee から物質としての \wedge 一 \vee へ進む集中と、精神としての \wedge 一 \vee から顕在的多数性といふ限りでの物質としての \wedge 多 \vee へ拡がる分散といふ差異がある。

(3) 以上の違ひは、体験の受動相と能動相との差異に還元できよう。すなはち、『物質と記憶』でベルクソンは、「回路」の譬喩を用ゐてイメージの外的投射を語つてゐたのであるが、そこでは言葉の聴覚的再認のやうな求心的刺激を前提とする受容経験が問題であつた。しかるに「知的努力」においては、発明や創作といふやうな遠心的歩みが前面に押し出される創造経験が問題とされてゐる。つまり、逆円錐は知覚への到達をあらはす譬喩であり、ピラミッドは力動的図式からの出発をあらはす譬喩である。

(三) 図式とイマージュとの往来

本節の最後では、最高度の知的努力としての創出の努力の中で、とくに藝術的創造の場合を取り上げ、そこに見られる力動的図式とイマージュとの独特の関係を考察しよう。「小説をつくる作家、人物や状況を創り出す作家、交響曲を作曲する音楽家、オードを書く詩人は皆、まづ精神のなかに単純で抽象的な、つまり非物的な何かを持つてゐる。それは、音楽家や詩人にとつては、音やイマージュに繰りひろげるべき新しい印象である。

小説家や劇作家にとつては、諸々の出来事に展開すべき命題^{テーマ}であり、活きた人物に具体化すべき個人的もしくは社会的な感情である。彼らは全体の図式に働きかけ、諸要素の判明なイマージュに到達するとき、結果が得られる。」(E. S., 175, OE., 947.)

ここに示された創作する藝術家の心の働きが単純なものでないことは、ベルクソン自身知らないはずはない。といふのも、ベルクソンは、注意深い知覚を対象↓感覚↓観念といふやうな直線的進行として捉へないやうに、創出の過程を図式↓イマージュといふ一方向的展開とは見てゐないからである。「それ〔図式〕は自らに満たさうとする諸々のイマージュによつて変化をかうむる。往々にして、決定的なイマージュのなかに元の図式はもはや何も残らないことがある。〔……〕小説家や詩人によつて作り出される人物は、それらの人物が表現することになつてゐる観念や感情に逆に働きかける。」(175-6, 948.)ベルクソンはここで、「イマージュが図式の方に振り向いて、図式を変化させ、あるいは消滅させるやうな運動」(176, 948.)を指摘することによつて、藝術創作の過程におけるフィードバック構造を認め、そこに創出の予見不可能性を見出してゐるのである。

かくして図式は、創作がなされてゆく時期によつて「ゴムの輪」(182, 953.)のやうに変貌を遂げる。「知的努力」といふ論攻の核心をなす次の洞察を見よう。「イマージュに対するイマージュの影響のほか、図式によつて諸々のイマージュに及ぼされる引力や推力がある。表面で、ただ一つの平面上でなされる精神の展開のほか

に、深い所で一つの平面から他の平面へ行く精神の運動がある。連想 (Association) のメカニズムのほかに、心的努力 (Effort mental) のメカニズムがある。¹⁹⁾ (189, 958-9.) したがって、拡がり (extension) において表面で続けられる「イマージュそのものの間の彷徨」(167, 941.) は水平の運動であり、強さ (intensité) において深い所で続けられる「図式とイマージュとの間の往来」(182, 953.) は垂直の運動であつて、両者は強度のみならず方向が異なつてゐる。しかし実際には、これら二つの運動は同時に続けられながら、図式からイマージュへと降りてゆく、と言ふべきである。それゆゑ、当初は「図式とイマージュとの間の戯れ」とも言はれてゐたこの内的な運動、つまり心的努力は、図式によつて組織されるイマージュ同士の水平的拡散運動と、意識の諸平面を貫く図式からイマージュへの (昇降を続けながらの) 垂直的下降運動とが同時に連続進行するものである、と解釈されよう。

結 図式概念の発展

最後に、運動図式と力動的図式との関係についてのわれわれの考察の到達点を明らかにしておきたい。まづ、 $\langle \text{le schema} \rangle$ と $\langle \text{le scheme} \rangle$ との用語法について一言しよう。辞書によれば一般に、前者は、事物の構造や機能などを端的に示す図表や素描を意味し、後者は哲学的概念として、カントの先験的図式 (感覺によつて知覚される現象と悟性の範疇とを仲介するもの) などを意味する場合に用ゐられる。ベルクソンはこの区別を念頭において、運動図式と力動的図式とで $\langle \text{scheme} \rangle$ と $\langle \text{schema} \rangle$ とを使い分けてゐるのであらうか。

これは、ベルクソンが運動図式と力動的図式とを二つ並べて語つてゐるテキストが見当たらないので判然としないのであるが、いくつかの理由から、ベルクソンが意識的に両者を使い分けてゐたとは考へにくい。まづ、一

九〇六七年のコレージュ・ド・フランスでの講義「意志の理論」において、ベルクソンは意志的な努力の諸形態を論じてゐるが、フォンタナの講義ノートを見ると、創出の努力において働く図式に対しては「schéma」が、知覚において働く図式に対しては「schéma」が用ゐられてゐる（Mél., 721-2）。次に、ベルクソン自身が一九〇一年の会議「心身平行論と実証的形而上学」のなかで、運動図式を「schéma moteur」と言つてゐる⁽⁵⁾。そして何よりも、ベルクソンが運動図式と力動的図式とを別個の概念として峻別すべき謂れが果たしてあつたのか、といふ疑念がある。

次に、二つの図式の関係についてであるが、これについて積極的な解釈を下したものとしては、マデイニエの考へとドゥルーズの考への二つを参照することができる。両者の解釈を検討してみると、両図式に対する理解は多少異なつてはゐるが、次の点では共通である。すなはち両者とも、運動図式と力動的図式とを別の図式と考へたうへで、想ひ出が現実化するときに先づ力動的図式が、次いで運動図式が連続的に関与してゐるものと解釈してゐる⁽⁶⁾。しかし、「知的努力」において想ひ出の現実化が説明されるときに、運動図式といふ言葉が一度も登場しないこと、さらに、一九〇三—四年のコレージュ・ド・フランスでの講義「記憶の理論史」のなかでベルクソンは、例の逆円錐を描きながら、運動図式ではなく力動的図式といふ言葉を用ゐて想ひ出から知覚への移行を説明してゐることなども考慮にいれると、やはりそのやうな解釈には賛同しがたい。

本論致が明らかにしてきたやうに、ベルクソンの両図式は本質を異にする二概念といふよりはむしろ、一つの図式概念がベルクソニスムの展開とともに進化発展したものと考へるべきではないか。すなはち、最初、言葉の聴覚的再認といふやうな受動的経験において規制的な原理として考へられた運動図式は、魂と身体、あるいは精神と物質とを媒介する形で働く顕在化の原理であるが、顕在化の過程そのものが、精神の能動的な関与をまつてはじめて可能となるやうな再構成もしくは再創造であることから、藝術創作といふやうな能動的経験においても

この図式を創造原理として立てることが可能であり、それをベルクソンは力動的図式と名付けた、と解釈することができる。

「知的努力」に見える次のベルクソンの言葉には、図式概念の成熟を見ることが出来るやうに思はれる。「われわれがこの研究全体を通じて考察してあるやうな心的な図式（ie schéma mental）が規定されるのは、たしかに現実的な、もしくは可能的なイメージに依じてである。この図式は、イメージを待つこと（attente）において成立する。すなはち、記憶の場合のやうに、或るはつきりしたイメージの到来を準備したり、あるいは創造的想像力の場合のやうに、図式に組み込まれることのできる諸々のイメージの間に多かれ少なかれ長引く戯れを組織したりするための知的態度において成立する。」（E. S., 187, (E., 957.）生成（*dévenir*）において力動的に与へられる図式を、イメージへと現実化して静態的^{トリス}なす、つまり出来あがつた（*cout fait*）ものにするためには、待たねばならない。それは、非物質的なものを徐々に物質化する働きが、生命活動の根柢にあると考へられてゐるからである。

ベルクソンの図式を、個別的对象といふには余りに抽象的で、一般概念といふには余りに具体的な中間的存在様態を示す表象と捉へることに異論はない。しかし、この中間的な表象が、サルトルの言ふやうに「思惟の活動性および統一性を感覺的なもの惰性的な多様性に結びつけ直すための術策」にすぎなかつたとは思はれない。内的発展を続けたベルクソンの図式論の意義は、この媒介的なところを、生命作用の本質である心の努力のうちに認め、そのメカニズムを「回路」の運動や「図式とイメージとの間の往来」として力動的に解明した点にある、と言はねばならない。

註

ヘルクソンからの引用は、次に掲げる略号を用ひて、頁数と共に本文中に註記する。ただし、同じ著作からの引用が続く場合は頁数のみを示す。なほ、各著作の頁数は、ヘルクソン『著作集』生誕百年記念版が採用してゐる現行のP.C.C.版によるものである。

- {œuvres, édition du centenaire, P. U. F., 1959¹, 1984⁴.
 Mél., *Mélanges*, P. U. F., 1972.
 M. M. *Matière et mémoire*, 1896.
 E. S. *Énergie spirituelle*, 1919.

なほ、註に見られる引用頁数で漢数字のものは、訳書の頁数であるが、訳文は論者によるものである。

- ① ヘルクソンは「souvenir」と「mémoire」とを区別してゐる。本稿では、主として記憶内容を意味する前者に「想ひ出」、記憶作用を意味する後者に「記憶」といふ訳語を宛ててゐる。
- ② Jacques Chevalier, *Bergson*, Plon, 1926, p. 168.
- ③ Gilles Deleuze, *Le bergsonisme*, P. U. F., 1968, pp. 64, 68. (宇波彰訳『ヘルクソンの哲学』法政大学出版社、一九七四年、七四、七十五頁)
- ④ Vladimir Jankélévitch, *Henri Bergson*, P. U. F., 1959, pp. 116-7. (阿部一智、桑田礼彰訳『アンリ・ヘルクソン』新評論、一九八八年、一五八頁)
- ⑤ ヘルクソンは、一九〇一年五月二日の会議「心身平行論と実証的形而上学」で次のやうに述べてゐる。「与へられた同一の脳の状態には多くの異なつた心理的状态が対応しうが、任意の状態が対応しうるといふ訳ではない。それらは皆、同一の運動図式(schéma motreure)を共有してゐる心理的状态である。同一の額(cadre)には多くの絵が入れられようが、すべての絵が入るといふ訳ではない。」(Mél., 418.) (この会議では「schéma motreure」ではなく「schéma motreure」と言はれてゐる。後者の用例は他に、Mél., 484, 490, 498. にも見られる。) 絵と額の譬喩については、他にMél., 1069 (1085), 1216-7. を参照。

- (6) ノランは、ヘルクソンの反射の概念に注目すべきことについて、現存 (présence) としてのイメージから再現＝表象 (représentation) としての意識を導き出すべきことである。Paul Naulin, "Le problème de la conscience et la notion d'« image »," *Bergson : naissance d'une philosophie*, Actes du colloque de Clermont - Ferrand / 7 et / 8 novembre / 1989, P. U. F., 1990, pp. 97 - 109.
- (7) 一九〇〇年八月二十四日の第六回国際心理学会議で、ヘルクソンは既にこの問題について語っているが、その発言のうちに運動図式から力動的図式への推移が示唆されている。Cf. *Méi*, 435.
- (8) ルロワによれば、ヘルクソンの円錐の図式は、バークリが高く評価していたチェーン (George Cheyne) の次の書物に見られる無限の円錐の譬喩からヒントを得て作られた可能性がある。Philosophical Principles of Religion Natural and Revealed, in two parts: Part I containing the Elements of Natural Philosophy and the Proofs of Natural Religion arising from them, the second edition corrected and enlarged (1705¹); Part II containing the Nature and Kinds of Infinites, Arithmetick and Uses, together with the Philosophick Principles of Revealed Religion, now first published, London, 1715. the preface of the second part, § 11, A₂ and A₃. ルロワの比較では、チェーンの円錐が、ヘルクソンの円錐と同様に倒立してあり、段階的に並んだ諸断面が見られ、そこにはヘルクソンの「意識の平面」の理論と共通する考へが見出せる。André-Louis Leroy, "A propos du cône bergsonien," *Revue philosophique*, 1957, pp. 65 - 8.
- (9) G. Deleuze, *op. cit.*, p. 56. (六二頁)
- (10) この点で、イボリミットの解釈は傾聴に値する。Jean Hypollite, "Aspects divers de la mémoire chez Bergson," *Revue internationale de philosophie*, octobre 1949, pp. 373 - 91. 「有名な円錐のイメージは、精神の可能的な二重運動を象徴するのみである。それは即ち、行動の点に至るまでの精神の収縮か、あるいは夢想に至るまでの精神の無限の膨脹 (dilatation) であるが、精神の各々の調子において、各水準において、記憶はその全体が与へられ、過去のエクスタシスに連れ出す方向と身振りのエクスタシスに導く方向といふ二重の方向が指し示されているやうなものである。」 (p. 381.)

① 第七版 (一九一一) 以前の版の序文を参照。OE., 1490.

- ⑫ Georges Mourélos, *Bergson et les niveaux de réalité*, P. U. F., 1964, p. 107.
- ⑬ ヘルムンツは「真の自己」を説明する際にも金貨の譬喻を用いてゐる。Mél., 1060. Cf. P. Douglass, "The gold coin : bergsonian intuition and modernist aesthetics," *Thought* 58, 1983, pp. 234-50.
- ⑭ Henri Gouhier, *L'Œuvre théâtrale*, Flammarion, 1958, p. 70.
- ⑮ V. Jankélévitch, *op. cit.*, p. 113. (一五四頁)
- ⑯ *Ibid.*, p. 115. (一五六頁)
- ⑰ G. Deleuze, *op. cit.*, p. 55. (六一頁)
- ⑱ ヘルムンツは「この箇所に続けて次のやうに書いてゐる。〔……〕精神の通常の働きにおいては、ちやうど頂点を下に立ててゐるピラミッドにおけるやうに、すべてがそれら〔感覚と運動〕の結合に依存してゐる。」(M. M., 193, OE., 311-2.) ここには逆円錐の代りに逆ピラミッドの譬喻が用ゐられてゐる。しかし、一九〇一年五月二十六日の「夢」とらふ講演では、倒立してゐないピラミッドの譬喻で記憶の役割が説明されてゐる。(E. S., 95, OE., 886.) このJankélévitchの上下が元に戻されてゐるのは、無数の想ひ出が意識の下に潜在してゐて、意識の表層に上つて来ないといふイメージによるのであらうが、翌一九〇二年一月に *Revue philosophique* に発表された「知的努力」において、この同じピラミッドの譬喻で力動的図式の説明がなされてゐるのは、運動図式と力動的図式との連関を示唆してゐて興味深い。
- ⑲ サルトルはこのテクストを引きながらヘルムンツの図式論を徹底的に批判してゐる。J.-P. Sartre, *L'Imagination*, P. U. F., 1936, p. 62. (平井啓介訳「想像力」サルトル全集『哲学論文集』所収、人文書院、一九五七年、六八頁)
- ⑳ 「運動図式と力動的図式とは連続してゐる。」(Gabriel Madihier, *Conscience et mouvement*, P. U. F., 1938, Nauwelaerts, 1967², p. 390.) 「とくに、運動図式と力動的図式とを混同してはならない。両者はいづれも現実化に介入するが、それはまったく異なつた位相においてである。すなはち、一方は純粹に感覚→運動的であり、他方は心理的で記憶に関する(mnémonique)ものである。」(G. Deleuze, *op. cit.*, p. 64. 七七頁)
- ㉑ J.-P. Sartre, *op. cit.*, p. 70. (一七六頁)